

長谷川武次郎に協力した外国人たち

本学図書館のスペシャル・コレクションより (43)

ちりめん本の先駆者、
長谷川武次郎に協力した外国人たちの話
奥 正敬

■はじめに

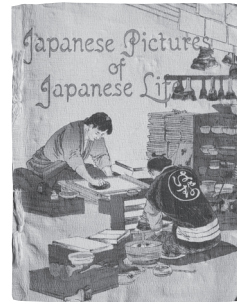
ちりめん（縮緬）本を大量に作り海外にまで輸出した長谷川武次郎（1853-1936）⁽¹⁾のもとには、浮世絵師や木版和本の技術者と共に、伝承物語を外国語に翻訳する在留外国人が集まりました。武次郎の代表的な刊行物“Japanese Fairy Tale Series”（『日本昔噺シリーズ』）の第1号が刊行された明治十八（1885）年頃からその人脈は次第に広がります。ここでは、ちりめん本の発展の基本になった英語版『日本昔噺シリーズ』の翻訳に携わった外国の人たちについて振り返ってみたいと思います。

■長谷川武次郎とちりめん本

長谷川武次郎が江戸、日本橋の西宮家に次男として生まれた1853年は、奇しくもアメリカのペリー提督が来航した嘉永六年にあたります。彼の生家は日本が西洋諸国との通商条約を締結した安政五年（1858）以降のことかと思われませんが、外国食料品の販売で栄えるようになり、欧米の酒類、食料品、たばこなどを扱っていたとされています。この環境の中で外国語の必要性を感じた武次郎は、16歳になった明治二（1869）年に宣教師クリストファー・カロザース（Christopher Carrothers, 1840-?）夫妻の私塾で英語を習い始めています。英語を身に付けた武次郎は、母方の姓「長谷川」を継ぎ、明治十七（1884）年には長谷川弘文社として出版事業に携わるようになります。やがて印刷業者小宮惣次郎の娘屋寿と結婚します。小宮家は彫り師や刷り師を抱えており、この人的資産を活かして、日本の伝承文学を外国語で表現した和本「ちりめん本」の作成を始めたのです。

ちりめん本とは、江戸時代から続く手法で作られられた書物で、和紙上に絵師が浮世絵手法で絵を描き、彫り師が木版を彫り、刷り師が

上質和紙上に馬棟で刷り上げ、それに揉み師が縮緬状に縮みを入れたもので、英語ではクレープ・ペーパー・ブック（Crape-paper book）と呼んでいます。武次郎の作ったちりめん本は、この過程で外国語に翻訳された伝説や民話、神話などの伝承文学の物語が鑄造活字で印刷されています。また、仕上げの製本は伝統的な和綴じ形式の装丁になっています。浮世絵を含め江戸時代に隆盛を極めた一連の技術は、世が明治に移ると次第に洋式書物の作成技術の勢いに押され、いずれの分野も衰退の道を辿り始めていました。武次郎はこの工法に再び光をあてたのです。



『絵でみる日本の人々の生活』
(本誌の表紙と表紙解説を参照のこと)

■外国人を魅了した和本と伝承文学の組み合わせ

長谷川弘文社を立ち上げていた武次郎が企画した“Japanese Fairy Tale Series”（『日本昔噺シリーズ』）の出版計画がどれほど詳細なものであったのかは分かりませんが、当初は数人の在日欧米人がちりめん本の編纂に共感を覚え、これに協力したものと思われる。

彼らにとって、和紙から出来たちりめん本という資料媒体が、明治時代初頭より他社で作られていた日本昔噺の外国語翻訳書にない異国情緒を英語圏の読者に与えられると考えたのではないのでしょうか。

また、このちりめん本に書かれた伝承文学には、「善きことを勧め、悪きことを懲らしめる」という所謂、勧善懲悪の思想に貫かれたものが多くあります。おそらく外国人は翻訳を進める過程で、この社会道徳の全国津々浦々までの広